

III バラエティーが「嫌われる」5つの瞬間

「このバラエティーのここがいやだ」「こういうバラエティーはやめてもらいたい」という視聴者の意見は、概略、次の5つに分類することができる。

- 1 下ネタ
- 2 イジメや差別
- 3 内輪話や仲間内のバカ騒ぎ
- 4 制作の手の内がバレバレのもの
- 5 生きることの基本を粗末に扱うこと

1から3は、わかりやすいだろう。4もむずかしくはないが、このごろは案外多いのである。

しかし、5については、少し説明がいるかもしれない。何を切実な「生きることの基本」にするかは、人によっても、生活環境や価値観によっても千差万別であり、一概には決められない。にもかかわらず、視聴者意見のなかには、「生きることの基本を粗末に扱うこと」としか分類できないようなものが、確実にある。これについてはのちほど、もう少しくわしく見ていくことにする。

一々の放送局や番組や出演者の名前は省略するが、思い当たる制作者は、ここで指摘されていることが「誤解だ」「深読みのしすぎだ」「見当外れだ」「もっとちゃんと見てほしい」等々と反論したい気持ちもあるかもしれない。

だが、これはあくまで視聴者が「バラエティーのこういうところがいやだ」と言っている全体の傾向がどんなものかを概観するための作業である。どの局、どの番組のことを言っているのかなどという下世話な詮索はやめて、現在の視聴者像を探るための手がかりとして、お目通しいただきたい。

1. 下ネタ

女性出演者の水着姿の写真を団扇にし、その股の部分に開けた穴に指を入れてあおぐ形にしたものを、番組のなかで配っていた。子供も見る番組なのに、信じられない。女性の体を蔑視した放送で、こういうことを平気でやる風潮が、女性を対象とした凶悪事件の土壌になっているのではないか。

タレントの1日に密着という企画で、宇宙人がそのタレントにインプラントしたとかいつて羽交い締めにし、下半身局部の写真を撮っていた。また、楽屋で着替えているタレントの全裸のうしろ姿を隠しカメラで撮影し、放送した。子供も見ているゴールデン帯の番組で、このような卑猥な番組は放送しないでもらいたい。家族で見ていて、不愉快になった。

渋谷の駅頭で女性100人にアンケート調査をしたといって、「○んこ。○のなかに入る文字は?」のランキングを放送していた。1位「う」、2位「あ」、3位「ち」、4位「い」、5位「ま」、6位「わ」……だそうだが、1位、3位、5位は下品で、放送に適さないのではないか。

タレントが司会する番組のコントのひとつで、トランプの手品をしていた。その際、タレントはトランプに女性器を表わす図を描いて、マークにした。相方が「こんなマークはつけないようにつ」と笑いながら言っていたが、放送でやるようなことではない。子供たちへの影響が心配だ。

司会のタレントが9歳の天才卓球少女と対決するコーナーで、タレントはズボンのチャックを下ろし、そこからピンポン球を取り出すなど、卑猥な行為や言葉を連発していた。大人が9歳の子供を相手にする言動ではない。

2. イジメや差別

司会役のタレントが、黒人の演歌歌手に、「顔、黒いな。何をつけたんや」と言っていた。皮膚の色をからかうなんて、最低だ。

ミュージシャンのサックスを預かり、本人の知らないうちにシャワーHEADとして利用し、それを見たミュージシャンが泣くのを、まわりのみんなで笑う、という場面があった。仮に、事前の了解があったとしても、楽器を大切にしない、人を泣かせて笑う、という映像

は醜くて、見ていられなかった。

出演者がトークしながら、アメリカの黒人はテレビを盗む、銃をよく使うというような映像を流し、黒人に対する偏見や人種差別をあおるような番組をやっていた。黒人に関する悪いイメージを故意に放送したとは思わないが、もう少し人種問題に敏感になった方がいいと思う。

手錠をかけ、動けなくした芸人を熱湯に突き落とす。女性出演者を足蹴にする。スタッフをパンツ1枚にして、真冬の戸外に出す。無口な女優を追い詰めて、言葉責めにする。芸人にビニール袋をかぶせ、隙間からスプレーを噴射し、息ができないようにする。こういう場面を、まわりの出演者やスタッフが手を叩き、はしゃぎながら見ている。イジメを助長するどころか、悪意の塊にしか見えない。ゴールデンタイムに放送するのは、ひどすぎる。

芸能人の運動会の番組で、先輩格のタレントが女性芸人をからかい、背後から胸をわしづかみにして揉むシーンがあった。彼女はその手を払うことはしなかったが、嫌な表情を浮かべていた。これは芸能界の上下関係を嵩に着たパワハラ、セクハラではないか。こんなことをするタレントもタチが悪いし、こんなシーンを放送する局も悪い。



3. 内輪話や仲間内のバカ騒ぎ

タレントがお笑い芸人所有の車にペンキを塗りたくったり、その車を運転して芸人を追い

かけ回していた。脚にぶつかっただけですんだが、危険だし、意味のない低俗な笑いにしか思えない。（局に電話して、担当者に聞いたら）「あくまで演出上、芸人所有の車にしただけで、実際はちがう」と言われ、唖然とした。

番組中、タレントのキャスターが、不倫騒動を起こしてバッシングを受けている女性出演者に向かって、「就職先を探してやる」「ウチにこないか」などと馴れなれしく話しかけていた。公共の電波を私物化している。こんなキャスターは辞めさせるべきだ。

スタジオ番組で、「ニューハーフのオッパイを絞ると母乳が出るか。出た母乳を濃縮し、バター状に加工したものをトーストに塗って、食べることは可能か」という愚劣な実験をやっていた。以前にも同じ番組で、「小鼻の脂でステーキを焼くことは可能か」という実験をやっていて、気持ちが悪かった。こんなくだらないことで出演者たちが大騒ぎする番組を流す放送局があることが、情けない。

バレンタインデーの企画という番組で、タレント出演者を「チョコフォンデュ」にする場面があった。溶かしたチョコを頭から流される様は、見るに堪えない光景だったが、他の出演者は手を叩いて喜んでいた。行き過ぎた内容ではないか。

先輩芸人が後輩の芸人に、「オマエの自宅に連れていけ」「嫌ならバリカンで髪を切る」と迫り、自宅に行くと、勝手に高額な商品を注文し、飲み食いし放題。傍若無人のふるまいをして、泊まらせてもらうという企画だが、出演者同士、事前に納得した上でのことであっても、行き過ぎた内容だと思う。



4. 制作の手の内がバレバレのもの

米国のオバマ大統領候補（当時）によく似た芸人が選挙運動中の本人に近づき、「オバマ本人に、そっくりさんとして認めてもらう」という企画があった。芸人が「My name, Obama ! My name, Obama！」と叫ぶと、オバマ候補は困惑して、「Oh, is that right？」と答えていたが、字幕は、芸人「僕はオバマですか？」、本人「君はオバマだ！」と、オバマ本人の公認を得たかのようになっていた。そのビデオ映像を見て、スタジオはお祭騒ぎだったが、これは意訳どころか、英語のわからない出演者や視聴者をだます捏造ではないか。

深夜のトークバラエティーで、2人のタレントが街頭で通行人の年齢や出身地を当てる企画。制作スタッフが通行人になりすまして、出演していた。視聴者が、その通行人と同じ名前が番組最後のスタッフロールにも出ていることに気がつき、放送局に問い合わせたことから、問題化した。

引退したプロ野球投手が「疲れていて、投げたくなかった試合」のエピソードを話したとき、野手たちが心配して、彼を囲んでマウンドに集まった様子が映し出された。しかし、それは別の球場の、別の試合のときのシーンだった。その後、当の試合の映像にもどって、2三振を取るのだが、話と関係のない、まったく別の映像を挿入して、断わりもなく、そのときの映像のように見せるのは虚偽放送ではないか。

バラエティ一番組で観客の笑い声や驚き声を効果音のように入れることがあるが、だいたい観客など入れてもいないスタジオや会場の収録なのに、このような効果音を入れる必要があるのか。わざとらしいし、はっきり言って、音による捏造だと思う。

インターネット上の情報の真偽を検証するといって、情報のもととなったブログ画面を映しながら、「地下鉄にカーブが多い理由」「サケとシャケのちがい」等々について出題するクイズ形式の番組があった。しかし、そのブログは実際には存在せず、制作者が番組のために作ったことが、視聴者の指摘で発覚した。

自転車通勤・通学を取り上げた番組中、リポーターが歩道を走る自転車の速度を測っていたが、最初の1台が時速40キロ、9台の平均速度が34キロだと放送していた。34キロは高校生の100メートル走の日本記録に匹敵するが、とてもそんな速さで走っているようには見えなかった。また、中年女性が惰性で走行する速度についても、33キロと言っていた。プロレーサーが少し力を抜いて走る速度が35～40キロだから、ママチャリ

では絶対そんな速度は出せない。計測ミスか、計測機器の故障か、あるいは自転車を故意に危険なものだというためのウソではないか。



5. 生きることの基本を粗末に扱うこと

小学生の男の子が給食のパンを喉に詰まらせて亡くなる、といういたましい事故があった。そのお子さんはテレビ番組の真似をして早食いを試みたという。そのような事故を教訓に、番組から「大食い」「早食い」の企画は姿を消したと思っていた。ところが、ある局が大食い番組を3時間にもわたって放送しているのを見て、私は呆れてしまった。

冒頭、局アナや出演者が喪服を着て並び、「今日未明、歌手のKさんが亡くなりました。今夜は予定を変更して、追悼番組をお送りします」と言った。ビックリして、友だちともメールのやりとりをしたが、数分後、おふざけであることがわかった。視聴者を驚かせて画面に釘付けにさせようという魂胆が姑息であるだけでなく、これは人の生き死にをもてあそんでいる。死を笑い事として扱ってほしくない。

グラビアアイドルが「暖房を消し忘れ、つけっぱなしにしたまま海外ロケに行ったのだが、その分の電気料金を払わない、と電力会社に30分にわたってクレームの電話をした」と得意満面で話していた。本当だとしたら、幼稚でわがままで非常識というにすぎない。さすがに他の出演者も「これは放送できないだろう」と言っていたのに、堂々と放送していた。

お笑い芸人やスタッフが川のなかにバシャバシャ入っていき、国の天然記念物に指定されているオオサンショウウオを追いかけ回し、網で捕獲していた。「特別の許可を得ています」とテロップが出ていたが、出演者の大はしゃぎばかりが目立って、どういう意図があるのかわからない番組だった。画面から場所の特定もできそうで、心ない人たちのいたずらを誘発しそうだった。天然記念物である生き物をこんなふうに乱暴に扱っていいなどという許可は、誰が出したのか。テレビ局の見識を疑う。

学校を舞台に、若いタレントたちが先生と生徒になって、授業のように雑学コントをやってみせる番組で、先生役のタレントがヒトラーのことを、「演説上手で国民の心をつかんだ。その口調は癒しがある搖らぎのリズムで、国民は惹きつけられた」などと紹介し、世界の偉人として取り上げていた。視聴者からは「いくらコントでも、歴史認識のひどさは目に余る」「制作者もタレントもまったく無知だ」等々のクレームが相次いた。

*

以上、BPOに寄せられた視聴者意見等を5つにパターン化し、例示してみたが、分類は便宜的なものであり、ざっと読んでもわかるとおり、ものによっては他の分類とかさなるものもある。

こうして並べてみると、いったいどういうときにバラエティーが視聴者からいやがられているか、おおまかな傾向はうかがえると思う。

さて、問題はここから何を読み取るか、である。

